

# 『閩中會館志』 所載の 明代創建の諸会館について

——明清交代後の会館再建を中心に——

張 九 龍

## はじめに

主として明代の会館組織を論じた先稿に続き、本稿では明代に作られていた会館が戦乱等に巻き込まれ、清代に改めて建設されたものを取り上げ、明清交代期の会館の遷移について検討したい。具体的には李景銘<sup>(1)</sup>の『閩中會館志』をもとに、明清交代の中で北京にある福建省の各会館の再建経緯について考察する。また、李氏の調査は民国三十一年（1942）に行われており、清末から民国にかけての会館状況についても多く触れていたため、民国の状況も含めて考察したい。

まず、『閩中會館志』の編纂過程について簡単に紹介する。1942年に民国政府内政部代理部長王揖唐<sup>(2)</sup>より、北京にある各省の会館状況についての調査依頼が出されたので<sup>(3)</sup>、閩県出身者である李景銘は閩県の会館状況の調査責

- (1) 徐友春主編『民國人物大辭典』李景銘「字石芝，福建閩侯人，1878年（清光緒四年）生。清進士。畢業於日本早稻田大學政治經濟系。回國後任財政部秘書。」（河北人民出版社，1991年，302頁。）
- (2) 『民國人物大辭典』王揖唐（1877-1946）「初名志洋，字慎吾，（略）號揖唐，別號逸塘，晚號今傳是樓主人，安徽合肥人，1877年（清光緒三年）生。光緒甲辰科進士。（略）1940年6月，任汪偽華北政務委員會委員，兼內務總署督辦。1942年3月，任汪偽國務委員會委員，1943年4月連任汪偽中央政治委員會委員。」86頁。
- (3) 李景銘『閩中會館志』程序「時王逸塘同年，兼督內務，石芝爲之記室，蓋奉署令而作。」又，自序「茲奉署令，遍查閩館，意在鉤稽版籍，梳剔錢縉。」（北京国家図書館蔵，民国三十二年鉛印本）

任者として任命された。李氏は現地調査を行った上で、当時の會館管理者及び関係者の口述も集めていた。更に、口述の裏付けとして記録文書があった場合も併せて會館録の中に収録した。調査する過程で李氏が會館の盛衰史と福建の人文・歴史が深く関わっていることを実感したことが『閩中會館志』を編纂するきっかけとなった<sup>(4)</sup>。

『閩中會館志』は清朝の地方制度に基づき、北京にある22ヶ所の會館を省館・府館・州館・県館の4つに分けて記載している。その内、省館は1ヶ所、すなわち福建會館（全閩會館とも言う）である。府館は11ヶ所、福州會館・福州新館・漳州會館・漳州西館・泉州會館・延平會館・延邵會館・建寧會館・邵武會館・汀州會館（即北館）・汀州會館（即南館）である。州館は2ヶ所、龍岩會館・永春會館である。県館は8ヶ所、龍溪會館・晉江會館・仙溪會館・漳浦會館・同安會館・安溪會館・福清會館・莆陽會館である。また、會館ごとに沿革・古跡・規約・文詞・古物・事実・軼聞遺事の7條に分けて記載している。沿革條は會館の場所・規模・創立時期・補修過程・創立者等について記載している。古蹟條は會館内にある碑文・碑志、會館に関する記録資料についてまとめたもの。規約條は歴代会館の条約を集めたものである。文詞條は詩文・楹聯・碑文・會館志等の文字史・資料の転載である。古物條は扁額・神牌・画像・書画・書籍・契約・科甲題名録等、會館の中で保管されている物品の紹介である。事実條は筆者が調査した際の會館の住居状況・支出等についての記録である。軼聞遺事條は科甲題名録の中に記載のある人物の伝記、或いは他の書物の中に關係人物の逸聞を集めたものである。李氏は時間の余裕があって、また事前に詳しい調査も行っていたから、會館志の編纂は僅か1ヶ月ぐらいで完成した<sup>(5)</sup>。

次に、『閩中會館志』の史料価値について簡単にまとめたい。李氏の現地調

(4) 『閩中會館志』自序「身所親經，目所熟睹，覺一木一草，每難忘種植之人，一碣一碑，俱有關盛衰之史。」

(5) 『閩中會館志』吳序「壬午（1942）春，余隨合肥王公，釐整故都各省會館，（略）閩縣李石芝秘書，報竣最早，且詳。又以公暇，走筆輯閩中會館志，逾月而書成。」

査で得られていた碑文・楹聯・契約文書等は今日既に散逸したものが多く會館志の中に収録されており、貴重な一次史料とされている。また、北京の閩県會館の建設・遷移はもちろん、福建の科挙状況・政治・文化・宗教・商業活動等の研究にも重要な参考価値があると考えられている。例えば、會館志の中には在京の閩籍官僚たちの文化活動や神信仰等の記録が多く見られているし、文学作品・絵・書法等の物も多く記録されている。特に「澄懷八友図題跋石刻」（「延禧堂憶旧帖」とも言う）という絵巻が最も貴重な物とされている。また、清末から民国初期にかけての會館の経済状況や収入・支出、商人が會館建設との関わり、會館の管理状況等の記録も多く残されている。

以上、『閩中會館志』の編纂過程や内容等について述べてきた。ここでは、同書の中から北京にある閩中會館の建設目的を提示したい。閩中會館には大きく、科挙士子の宿泊場所<sup>(6)</sup>と官僚の集い場所<sup>(7)</sup>の2つの大きな目的があると考えられる。まず、閩籍の学生（試子）たちの為に廉価な宿泊所を提供するのが最も重要な目的と考えられる。李氏が調査する際に、會館の中で保存されていた題名録からは1382名の進士と挙人が確認でき、かなり多くの科挙試子が會館を利用していた事が分かる。また、題名録では9割以上が清朝の進士である。次に、官僚たちが定期的に會館で集会を行ったり、後輩の試子を指導したりすることも度々あったと記されており、官僚間の連絡窓口としても機能していたと考えられる。更に、科挙が廃止された後に留学した閩籍の人たちが帰国後に積極的に学校建設や教育等に参与した状況についても多く書かれている。

最後に、私が今回に扱おうと考えている會館について簡単に説明する。『閩中會館志』の中に記載されている22ヶ所の會館の内9ヶ所が明代に創建されたものとされている。従って、私はこの9ヶ所を取り上げて考察したいと考

---

(6) 『閩中會館志』程序「京師之有會館，肇自有明，其始專爲便於公車而設，爲士子會試之用，故稱會館。」

(7) 『閩中會館志』陳序「會館之設，始自明代，或曰會館，或曰試館，蓋平時則以聚鄉人，聯舊誼，大比之歲，則爲鄉中試子來京假館之所，恤寒畯而啓後進也。」

えている。また、この9ヶ所の會館は明清交代の際に戦乱に遭い、清朝に入ってから再建されて、民国まで残されていたものとなる。明清交代の中で會館の遷移や清朝になってからの補修状況、更に、民国時代の會館利用状況や支出等が確認できるので、かなり貴重な史料である。

なお、文中にある書名や人名等の固有名詞の漢字表記は漢文に従う。また、各會館と関わっていた人物についてはなるべく伝記や年譜といった記録があった場合、載せる様に努めているが、同安會館の陳臚聲と李紫堂の二人のみ現状では記録資料が見つかっていない。下記、表1は今回扱う會館の一覧表で、『閩中會館志』に掲載している順番通りに作成したものである。

表1 會館名及び建設年代

|            |                  |
|------------|------------------|
| 福州會館       | 明代、詳細不明          |
| 漳州會館       | 萬曆年間 (1573-1620) |
| 延平會館       | 明代、詳細不明          |
| 邵武郡館       | 萬曆年間 (1573-1620) |
| 汀州會館 (即北館) | 萬曆十五年 (1587)     |
| 汀州會館 (即南館) | 萬曆十五年後 (1587)    |
| 同安會館       | 明代、内城に在る         |
| 福清會館       | 明代、詳細不明          |
| 莆陽會館       | 明代、詳細不明          |

## 1. 福州會館と福清會館

福州會館と福清會館は隣同士で、共に南下窪にあり、一帯は福州館街と呼ばれている。1号は福州會館で、2号は福清會館である<sup>(8)</sup>。虎坊橋の新館と區別

(8) 福州會館の沿革より、福州會館は南下窪2号にあると書かれているが、しかし福清會館の沿革では、福州會館は1号にあると書かれている。両會館の沿革や規模等から推測すれば、恐らく1号は福州會館で、2号は福清會館と思われる。従って、私が福州會館は1号、福清會館は2号とする。

する為に、福州會館は俗に福州老館と言う<sup>(9)</sup>。また、郭曾炘<sup>(10)</sup>『邠廬日記』は以下の様に記す。

我が郷は元々都に省館がなく、南下窪にあるのは福州老館であり、葉臺山<sup>(11)</sup>が書いた“萬里海天臣子，一堂桑梓弟兄”の對聯があり，また門の外には“皇都煙景，福地人文”の一聯がある。郷人は毎年の元夕（元宵節）になると，ここで花火を放つことで，下窪の花火は人々に知られる様になった。葉臺山の福清館はその側にある。（略）同光以降，宿泊者が増え，乱れるようになった。しかしながら，上元の燈籠と花火は昔のままに行われている。（略）虎坊橋街の西にある者は，福州新館といい，陳望坡<sup>(12)</sup>尚書の旧宅であり，尚書は帰郷の際に，宅を寄付して會館とした。光緒（1875～1908）中期，陳玉蒼は再び東隅の土地を開拓し，洋式の南北廳を建てた。（略）故老の話しによれば，元々會館は明代の時に東城の辺りにあり，後に八旗により没収されたので，下窪で新たに土地を購入した。また，洪文襄<sup>(13)</sup>は清朝に降服したのち，會館の中で郷人を招いてい

- 
- (9) 『閩中會館志』卷一・府館・福州會館・沿革（一葉）「福州會館，坐落南下窪二號（ここでは原文に従う），今稱福州館街，（略）以虎坊橋有新館，故俗稱福州老館。」『閩中會館志』卷四・福清會館・沿革（一葉）「福清會館，坐落南下窪，與福州會館毗鄰，今稱福州館街，一號爲福州會館，二號，即福清會館。」
- (10) 陳儀修『福建通志』総卷三十四・列傳分卷三十九・清卷八「郭曾炘，原名會矩，字春榆，號匏庵，侯官人。（略）光緒乙亥（1875）舉於鄉，庚辰（1880）成進士，改庶吉士，癸未（1883）散館用主事，分禮部，隸儀制司與修會典。」（上海図書館蔵，中華民國二十七年刊本）
- (11) 『明史』卷二百四十・列傳第一百二十八「葉向高，字進卿，福清人。父朝榮，養利知州。向高甫妊，母避倭難，生道旁敗廁中。數瀕死，輒有神相之。舉萬曆十一年（1583）進士，授庶吉士，進編修。遷南京國子司業，改左中允，仍視司業事。（略）熹宗崩，向高亦以是月卒，年六十有九。崇禎（1628～1644）初，贈太師，諡文忠。」
- (12) 『福建通志』総卷三十四・列傳分卷三十九・清卷六「陳若霖，字宗觀，一字望披，閩縣螺州人。乾隆丁未（1787）成進士，改庶吉士，校書文淵閣，受紗緞哈密瓜之賜，散館授刑部主事，進員外郎，總辦秋審，進郎中。（略）」（道光）四年（1824）入爲工部尚書兼管順天府事，轉刑部者，九年（1829）以疾休，予致仕歸，十二年（1832）四月，薨于天津。」
- (13) 『清史稿』卷二百三十七・列傳二十四「洪承疇，字亨九，福建南安人。明萬曆四十四年（1616）進士。累遷陝西布政使參政。崇禎（1628～1644）初，流賊大起，

たが、郷人は彼の不義を理由に、応じる人がかなり少なかった。(略) 文襄が購入していた洪莊は金魚池の隣にあり、下窰とかなり近く、下窰の老館もまた文襄が購入した者と疑われるが、しかし既に考証が出来なくなっている<sup>(14)</sup>。

以上の様に、福州・福清両會館は共に葉向高により創建されたものと考えられる。清代初期には八旗により没収されたが、洪文襄が下窰地の土地を改めて購入して再建させた。『邠廬日記』には乾隆（1736～1795）より以降の記録が『閩中會館志』と多少の相違を生じているので（郭氏は日記を書いた時に既に72歳の高齢なので、多少の誤りがあるのと考えられる）、李景銘の調査報告を以て修正したいと考える。

李氏の調査によれば、乾隆五年（1740）に一回<sup>(15)</sup>、道・咸（1821～1861）以降に数回に亘って補修され、最後に光緒十七年（1891）に陳玉蒼<sup>(16)</sup>により修理されていた事が分かる。また、福州會館の規模等について、李氏は「會館が明末に創られ、新館よりやや早く、中・東・西三つの院があり、大きな部屋

ㄨ 明莊烈帝以承疇能軍，遷延綏巡撫，陝西三邊總督，屢擊斬賊渠，加太子太保，兵部尚書，兼督河南，山，陝，川，湖軍務。(略) 康熙四年（1665）二月，卒，諡文襄。」

- (14) 郭曾炘撰『邠廬日記』邠廬日記二・六月廿九日「吾郷在都門本無省館，在南下窰者為福州老館，有葉臺山所題“萬里海天臣子，一堂桑梓弟兄”楹聯，大門外又有“皇都煙景，福地人文”一聯，因郷人每元夕，於此放煙火，下窰煙火為宜南相傳之一，葉臺山福清館即在其側，(略) 同光以後，寓公雜遷，有人滴之患，庭宇蕪穢，非復舊觀，然上元燈火，猶相沿故事也。(略) 在虎坊橋街西者，稱福州新館，為陳望坡尚書故宅，尚書告歸，捨宅為館，光緒中葉，陳玉蒼復於東偏拓地，用洋式添建南北廳事。(略) 據故老傳聞，則謂前明時，會館本在東城某處，為八旗沒收，乃別購下窰地。又傳洪文襄降清入關時，嘗就會館讌同郷，郷人不義其所為，到者寥寥，(略) 文襄所構之洪莊，即在金魚池旁，與下窰為近，疑下窰老館亦文襄所構置者，然無可考矣。」(『歷代日記叢鈔』第一八三冊，學苑出版社，2006年所収。)
- (15) 『閩中會館志』卷四・福清會館・文詞（一葉）「在清初始，自城內同時遷至南下窰，為今兩館之地址，其重修兩館，均為乾隆五年事。」
- (16) 陳宗蕃編『陳玉蒼年譜』光緒十七年（1891）辛卯「公年四十歲，倡議修福州新館，並南下窰老館。」(『民国文献資料叢編・近代人物年譜輯刊』第五冊，国家図書館出版社，2012年所収。)

45 間と小さい部屋 4 間あり、椅子や机は全部陳玉蒼尚書から贈られたものである<sup>(17)</sup>。」と述べている。

また、會館で行う年間行事として、上記『兩廬日記』に書かれている「下窪煙火」は最も有名な物である。また、郭則澐<sup>(18)</sup>『竹軒摭錄』には「年明けには同籍の官僚や新進の進士が集まって飲食会を開き、それは「團拜」と言い、この時期になると會館の前はかなりにぎやかになり、深夜になると「燈劇」も上映され、翌日の朝によく解散する<sup>(19)</sup>。」とある。つまり、福州會館は宿泊の機能以外に、娯楽や集いの場所としても利用されていたことが分かる。これは福州會館のみならず、他の地方會館でもよく見られる機能である。

そして、福州會館・古物條には「科名題版」と「神像及鐵五供」が記されている。科名題版というのは、字面通り閩県出身の歴代進士・挙人の名前が記している木版である。李景銘はこの科名題版について、清朝を通じて福建省出身の文状元は吳魯<sup>(20)</sup>・林鴻年<sup>(21)</sup>・王仁堪<sup>(22)</sup>の三人のみであり、そして科名題版は大字題版と小字題版の 2 種類がある<sup>(23)</sup>と述べた。また福州會館に保存さ

(17) 『閩中會館志』卷一・府館・福州會館・事實（二十七葉）「該館創自明末，視新館較早，中東西三院，大房四十五間，小房四間，椅棹均由陳玉蒼尚書璧捐置。」

(18) 『民國人物大辭典』郭則澐「字嘯麓，號蟄雲，福建閩侯人，1885 年（清光緒十一年）生。1903 年癸卯科進士，任翰林院庶吉士。曾任浙江溫處道。1914 年 5 月，任北京政府政事堂參議。」853 頁。

(19) 郭則澐『竹軒摭錄』「承平時，京曹同鄉貴，或同舉進士，舉人者，每歲首，必衣冠會飲，謂之團拜，其讌聚恒於各會館，笙歌選日，車馬如雲，夜深恒有燈劇，將曉乃散。」（『閩中會館志』卷一・福州會館・古蹟條による。）

(20) [清] 吳魯『百哀詩』附録・清故進士及第資政大夫且園吳公墓誌銘「公諱魯，字肅堂，號且園，晚號老遲，又號白華庵主。晉江人。（略）光緒丙戌（1886），考軍機章京，戊子（1888）中順天鄉試。庚寅（1890）始以進士及第，授翰林修撰。（略）公生於乙巳（1845）七月二日，卒於壬子（1912）八月二十八日，享壽六十有八。」（北京古籍出版社出版，1990 年）

(21) 『福建通志』総卷三十四・列傳分卷三十九・清卷八「林鴻年，字勿邨，侯官人。（略）道光八年（1828）舉于鄉，十六年（1836）成進士，（略）光緒十一年（1885）十二月薨，年八十有一。」

(22) 趙椿年署『王蘇州（仁堪）遺書』（費念慈録）王仁堪傳「王仁堪，福建閩縣人，祖慶雲，工部尚書，自有傳。仁堪，同治十三年（1874）由舉人考取內閣中書，光緒三年（1877），一甲一名進士，授翰林院脩撰，五年（1879）十二月，充武英殿協修。」（『近代中國史料叢刊』第 14 輯，文海出版社，1967 年所収。）

(23) 『閩中會館志』卷一・福州會館・古物八・科名題版（六～七葉）「福建終清之世，ノ

れている科名題版は大字題版に進士 12 名記されており、小字題版に 進士 896 名が記されている。小字題版の中には多数の欠落や名字が弁識できないものがある。また、大小題版のうち 23 人が「軼聞遺事」に伝記が記されている。一方で、「神像及鐵五供」のところでは會館の中に祀られていた神像及び祭る際に使われていた道具について書かれている。

會館の中院には葉文忠夫婦の像が祀られている。西院燕譽堂の後ろには長樂城隍神位を祀り、東院即ち景福堂には福德尊神（俗に土地公という）を祀っている。鐵五供は中院と西院に各 4 つあり、東院だけ 5 つある。宿泊者が借用することも多い<sup>(24)</sup>。

李氏が調査した際の利用者数及び福州會館の収入について「該館は現在（1943 年）28 戸、113 人が住んでおり、毎月の租金は 209 元<sup>(25)</sup>で、老館と新館の出費に充てても十分に余裕がある<sup>(26)</sup>。」と述べた。一方、福清會館については「會館毎月の収入は 29 元あり、多くはないとは言え、年間には 300 余元あるので、會館の補修には十分足りているので、會館はよく整備されている。（略）該館は現在 3 戸、24 人が住んでいる<sup>(27)</sup>。」と述べた。

ㄨ 祇有状元三人，吳魯爲晉江人，其題版懸泉州郡館，及晉江邑館，福州老館，宜有林鴻年，王仁堪，兩匾（略）茲就可以考見，並將高懸者，放下鈔錄，分爲大字題版，小字題版。」

(24) 『閩中會館志』福州會館・古物九・神像及鐵五供（十七葉）「館內中院，祀葉文忠夫婦塑像，高二尺餘，文忠夫人霞帔繡鞋，可見明朝婦女仍尚纏足，侍從兩列，男女各一。西院燕譽堂後三楹，祀長樂城隍神位，東院即景福堂，祀福德尊神，即俗說稱土地公。鐵五供存中院者四，存西院者四，存東院者五，亦多爲僑寓者借用。」

(25) 陳存仁『銀元時代生活史』第一章・一块钱尽是血和泪「綢緞舖中薪金最高的掌柜先生，每月的薪水不过八元；普通的职员，不过六元，四元，刚满师的学徒每月只有一元。」（上海人民出版社，2000 年，第 6 頁。）

(26) 『閩中會館志』卷一・福州會館・事實（二十七葉）「該館現在二十八戸，共一百十三人，每月館產租金，可取二百零九元，藉供老館及新館費用，有贏無絀。」

(27) 『閩中會館志』卷四・福清會館・事實（二葉）「該館每月收入二十九元，爲數雖屬無多，而合計全年亦有三百餘元，足供修繕之用，故屋宇極爲整飭，（略）該館現住三戸，共二十四人。」



## 2. 漳州會館（漳州東館とも言う）

漳州會館と称するものは漳州東館と漳州西館の2つがある。今回取り扱うのは漳州東館になる。漳州東館の沿革について、李氏は以下の様に記す。

漳州會館は冰窖胡同 24 号にあり、(略) 會館は東城に近いので、煤市街の西館と区別する為に、この館は俗に漳州東館と言う。話によれば兩館共に康熙帝年間（1662～1722）に創られ、この館は西館より先にあった。なぜなら、この館は西館よりやや狭かったので、やがて西館が創られると、後に東館は廃棄された。今は全部（東館）貸し出していて、煤廠となり、ただ西館の運営資金源とみなされ、會館とは言い難い。西館の班長は、道光年間（1821～1849）に一回修理されたことがあると言った。(略) 漳州西館は雍正四年（1726）に創られ、もし東館が西館より先に建てられたのであれば、即ち康熙年間の説には近いが、しかし梁菑隣中丞<sup>(28)</sup>の載せるところを見れば、この館は明代に創られていたと見られる<sup>(29)</sup>。

以上の記載によれば、漳州東西兩館は共に康熙年間（1662～1722）に創られていたことが分かる。しかし、梁章鉅の『歸田瑣記』では、漳州會館は明代に既にあったと書かれている。その記載を以下に記す。

---

(28) 『福建通志』総卷三十四・列傳分卷三十九・清卷七「梁章鉅，字閔中，又字菑林，晚年自號退菴，長樂人。(中略) 乾隆壬戌（1742）進士，改庶吉士散館，改禮部主事，(略) 卒年七十五歲。」

(29) 『閩中會館志』卷二・漳州會館・沿革（一葉）「漳州會館，坐落冰窖胡同二十四號，(略) 俗稱是館爲漳州東館，以其近在東城，別於煤市街西館，相傳兩館均創始康熙年間，是館或先於西館，何以知之，是館較西館狹隘，故既創西館，乃將東館廢棄，今且全部出租，爲煤廠，枉能視爲西館產業，不能以會館論，據西館長班云，道光年間，曾重修一次(略) 漳州西館，創於雍正四年，若東館先於西館，則康熙之說頗近，然以梁菑隣中丞所載觀之，則此館又創自明代。」

また、わが閩の各郡は皆北京に會館があり、泉・漳の兩館は元々一つであり、最も仲が良い。国初（清朝）洪文襄公が宰相になって以来、公は南安籍を以て、専ら泉館の同郷に親しくしてきた。従って、漳館の人は遂に訪問しなくなった。（略）漳館は当時冰窖衙門にあり、大街より遠くなかった<sup>(30)</sup>。

李氏が調査する際の會館状況と収入については、「會館は王化吉という煤商人に貸して、煤廠として利用されている。毎月の租金は24元。しかし、契約を結んでおらず、しかも王化吉は既に亡くなっていて、お金は王の弟より支払っている。現在は王姓の一戸だけ住んでいて、租金は西館の董事張我軍<sup>(31)</sup>より徴収している<sup>(32)</sup>。」と述べている。

恐らく、會館自体は明代に創られていて、明清交代の際に減んでしまい、康熙年間に改めて建てられたと考えられる。李氏が調査を行った際には既に何も残されていなかったもので、それ以上の事は考証できない。

### 3. 延平郡館

李景銘氏が會館を調査する際に当たって、この延平郡館は既に考証出来るものが殆ど残されておらず、李氏は当時の館長蕭樸<sup>(33)</sup>から會館の事情を聞こう

- (30) 梁章鉅『歸田瑣記』卷四・洪文襄公「又聞吾閩各郡，在京皆有會館，泉，漳兩會館本係合一，鄉誼最暱。自國初洪文襄公入相後，公以南安籍，專拜泉館同鄉，而漳館人遂不通謁。（略）漳館時在冰窖衙門，距大街不遠。」（中華書局出版，1981年，63-64頁。）
- (31) 『民國人物大辭典』張我軍（1902-1955）「本名清榮，（略）原籍福建南靖，1902年（清光緒二十八年）生於臺灣臺北。（略）1935年11月，任北平社會局秘書。1937年抗日戰爭爆發後，留居北平，任北京大學文學院日文教授，並翻譯日本文學作品，爲《中國文藝》月刊寫稿。」921頁。
- (32) 『閩中會館志』卷二・漳州會館・事實（五葉）「其中並無長班，且訂租之王化吉，業已物故，現由其弟按月付二十四元，亦未換立摺據，該館止住王姓一戶，每月館租，由西館董事張我軍經收。」
- (33) 李景銘と蕭樸の手紙によれば、蕭樸（名樸，字東瀛，號慶泰）は天津の紙商人であると記載されている。

としたが、館長はかなり年配で天津に住んでいるということだった。それで、館長と手紙を交わし、會館の情報を入手した<sup>(34)</sup>。蕭樸からの手紙の内容は以下に記す。

延平會館は、昔の試館であり、先朝の士が會試する際の北京での駐在所であった。明代に創られ、清朝の順治壬辰年（1652）に至って、先輩の林潤葵<sup>(35)</sup>等によって修復され、並びに順治門外には一ヶ所の産業があったと聞く。しかし道咸の間に、弊郡の士風が大いに衰え、故に在京の士子が日に減少し、面倒を見る人がいなくなったことで、順治門外の産業は煙滅してしまったという。現在は粉房琉璃街に一ヶ所が残されており、民国九年（1920）、在京の議員高登鯉<sup>(36)</sup>・曹振懋<sup>(37)</sup>・鄧德潜<sup>(38)</sup>等二十数人によって、資金を集めて修復した<sup>(39)</sup>。

- (34) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・沿革（一葉）「延平郡館坐落粉坊琉璃街，八十四號，館長蕭東瀛，年老常住天津，故館事由學生傅吉齋彰德之子沛興代理。（略）惟函查蕭東瀛，始知順治壬辰，經林潤葵修理一次，民國初，又經高登鯉議員等，修理一次，故相傳至今。」
- (35) 『福建通志』總卷三十三・選舉志・明進士「崇禎十五年（1642）壬午科，賜特用進士出身，林潤葵」
- (36) 高登艇・藩先龍修『順昌縣志』卷十八・列傳「高登鯉，字魚門，父聯梯，以孝義聞於鄉，自有傳。登鯉年十九入庠，明年食廩餼，二十六領辛卯鄉薦，戊戌大挑教諭，歷掌教華陽，龍山各書院，迄光緒三十年（1904），就書院改設學校，宣統二年（1910），被選諮議局議長。」（北京国家図書館蔵，民国二十五年鉛印本）
- (37) 『民國人物大辭典』曹振懋「字勉齋，福建沙县人，1873年（清同治十二年）生。辛亥武昌起義後，被举为福建省議會副議長。1913年，被選为衆議院議員。國會解散後，為新聞報撰述。1916年，第一次恢復國會時，仍任衆議院議員。1917年，任護法國會衆議院議員；9月，任大元帥府參議。1922年，第二次恢復國會時，再任衆議院議員。」1641頁。
- (38) 梁伯蔭修『沙縣志』民国一七年；卷之七・選舉・清舉人【德宗（光緒）二十八年（1902）條】「鄧德潜，署廣西岑溪容縣知縣，特授蒼梧縣知縣，兼署南甯道尹。」（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第233號，成文出版社，1975年所収。）
- (39) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・文詞（一葉）「函一云 延平會館，是昔年之試館，乃先朝士到京會試駐足之所，創自明季，至清順治壬辰年，經先輩林潤葵等修復，并開順治門外，亦有一處房產，乃因道咸間，敝郡士風大減，故京士子日少，無人照料，順治門外一房竟被湮滅，現存粉房琉璃街一處，民国九年，經在京議員高登鯉，曹振懋，鄧德潜等二十餘人，集資修復。」

李氏は上の手紙をうけ、蕭樸に林潤年が修復した説の証拠、及び高登鯉等 22 人による修復の詳細について聞いた所、蕭樸から民国九年の修復に直接関わっていた傅彰徳と言う人物が北京にいますので、直接傅氏に聞いた方がいいだろう、との返答があった。そこで、李氏は傅彰徳宛に手紙を送った。傅彰徳からの返信によれば、旧館は明代に創られ、萬曆年間（1573～1615）は最も盛んになり、館内には閣・戲臺・酒樓・亭榭があり、旧録の中には図式も収録されており、額や聯・碑文も多くみられていた、との返答だった<sup>(40)</sup>。更に、傅氏からの手紙には會館にまつわる逸聞も書かれており、その内容は以下に記す。

傅吉の手紙によれば、故老の相傳では、旧館は乾隆年間（1736～1795）に、回祿（火災）に遭い、古蹟は蕩然となり、後に再建したといえども、咸豐年間（1850～1861）、又祝融（火災）の災いに遭い、ここに館の南北の敷地は、隣居に横領されて家屋を建てられ、もとの敷地の 2/3 が失われた。宣統元年（1909）に至って、（略）粉房琉璃街の中には、已に延平會館の影跡すら無かった。詳細に調査した結果、初めて所存の館址は、全て魏姓によって横領されていたことを知り、（略）一年余りの訴訟を経て、初めて境界石を立て、魏姓に家屋を撤去する命令が判決された<sup>(41)</sup>。

以上、蕭樸と傅彰徳の手紙によれば、延平郡館は粉坊琉璃街 84 号にあり、具体的な建設年代は既に考証出来ず、會館は元々會試の際に同郷人が泊まる為

- 
- (40) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・古蹟（一葉）「因蕭東瀛所述太簡，又函向新京傅吉齋彰徳細詢，據其函稱，舊館創於明代，以萬曆年間，爲最盛，館內有殿閣戲臺酒樓亭榭，舊錄中均有圖志，匾聯碑文亦不少，并有房屋數十間，所有捐款姓名，及管理章程，記載綦詳。」
- (41) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・軼聞遺事（二葉）「傅吉函云，故老相傳，舊館於乾隆年間，曾遭回祿，古蹟蕩然，後雖重建，咸豐年間，又被祝融爲災，於是館之南北基地，被鄰居侵佔蓋屋，約失原有基地，三分之二，至宣統元年，（略）粉房琉璃街中，已無延平會館之影跡，經詳細調查，始知所存館址，全被魏姓侵佔，（略）訴訟年餘，始勘立界石，判（令）魏姓拆屋還地。」

の試館であり、明代より建設されていた。順治六年（1649）に林潤葵等より一回修復されており、乾隆年間（1736～1795）火災に遭い、古蹟は全部焼けてしまった。その後、道咸間（1821～1861）郡の同郷人が大いに減り、會館の管理も放棄されていて、一部の建物が減ってしまった状況になり、ただ粉房琉璃街の一ヶ所のみ残されていた。そして、現在の會館は民国九年（1920）に高登鯉議員等により提案され、同郷人が資金を援助したことで、再建されたものである。再建の詳細につて、傅彰徳は以下の様に述べている。

民国四年（1915）に至って、延平から北京へ赴く留学生の多くは住める館が無く、従って建寧・泉州・汀州・福清の各會館に分散して利用することを交渉していたが、民国八年（1919）の秋になると、上京してきた学生の数は著しく増えたので、各會館は満員状態になった。延平の同郷人にはなおさら住める所が無くなっていった。彰徳は新しい會館を建築しなければいけないと実感した。そこで粉房琉璃街に視察に行ったが、ただ管理員が住む土屋2軒、及び煤舖の土房三間しかなかった。土地は広いとはいえ、埃は山のように積もっていた。そこで、高魚門登鯉・劉鷹公佐臣・鄭翊周元楨・劉訓初祖貽・曹勉齋振懋、諸先輩の所に奔走し、會館を建設する方法を商談していた。高魚門議員のおかげで、在京の同郷人を招集して、會議を開き、修理の資金も調達され、そして彰徳に監修を委任された。この年の冬、木や瓦を改めて購入し、民国九年（1920）に着工された。各同郷人のおかげで、始めて今日の會館がある<sup>(42)</sup>。

---

(42) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・軼聞遺事（二葉）「至民國四年，延平人士來京留學者，多因無館可住，乃分居建寧泉州汀州福清各館，商借下榻之地，迨民國八年秋，來京求學者益衆，各館均患人滿，延平同鄉欲覓棲止尤難，彰徳知建築新館，不容再緩，乃赴粉房琉璃街視察，僅存館丁所住土房二間，及開設煤舖土房三間，地雖大，而塵埃堆積如山，不得已奔走於高魚門登鯉，劉鷹公佐臣鄭翊周元楨劉訓初祖貽曹勉齋振懋諸前輩之門，商議建館辦法，乃承高魚門義員，召集延平旅京同鄉開會，捐款興修，並委彰徳監造，即於是冬，預購木瓦，民國九年春興工，承各同鄉，慷慨捐資，始有今日之會館。」

李氏の民国三十二年（1943）の現地調査によれば、当時の會館は外省の人に賃貸されており、管理人の給料と修理の費用は十分取れていて、住民は八戸で37人おり、毎月の租金及び館産の収入は112元ある<sup>(43)</sup>。

#### 4. 邵武會館

邵武會館は正陽門の外、東草廠二條胡同（今は興隆街といい）140号にある。明代萬曆丙午（1606）年黃克謙<sup>(44)</sup>先生により創建され、光緒（1875～1908）の半ばに會館は黃岡館より横領されていたが、その後に取り戻され、修復された。そして、民国二年<sup>(45)</sup>（1912）丁濟生<sup>(46)</sup>等が協力して整理し、今日に至ったのである<sup>(47)</sup>。また、會館の創立経緯については「邵武會館創始誌碑文」が以下の様に記す。

私は官僚となって、140両を与えたが、水を飲めばその源を考えなければいけないように、一日でも故里を忘れることができようか。（略）諸君子はみな喜んで助け、一年余りで、千五百緡を集めて宅を買うことができ、3回に渡って転売した後に今の所を得た。（略）朝から夕まで作業を励ん

- 
- (43) 『閩中會館志』卷三・延平郡館・事實（二葉）「現在該館出租外省人，足供工資房租及修理費用，該館現住八戸，共十七人，每月館租及館產收入，可得一百十二元。」
- (44) 朱保炯・謝沛霖編『明清歷科進士題名錄』黃克謙「萬曆二十六年戊戌科（1598）第二甲」（沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續編』第七十九輯，文海出版社，1981年所収。）
- (45) 邵武會館の沿革には民国元年と書かれていたが、後の文詞四・館志序並びに丁濟生の紹介は共に民国二年と記されていたため、ここでは元年から二年に改める。
- (46) 『民國人物大辭典』丁濟生「字梅巖，福建建寧人，1848年（清道光二十八年）生。清拔貢生。法政學堂畢業後，分發江西，補用直隸州州判。（略）1913年被選爲衆議院議員。國會解散後南歸鄉里。國會恢復後，仍爲衆議院議員。1917年人護法國會衆議院議員。」10頁。
- (47) 『閩中會館志』卷三・邵武會館・沿革（一葉）「邵武會館，坐落正陽門外，東草廠二條胡同，今稱興隆街，一百四十號，（略）該館明萬曆丙午，黃克謙先生創建，（略）光緒中葉，館地被黃岡館侵佔，後又收回修葺，（略）民國元年，丁濟生當選入都，與寧李泰協力整理，館務稍復舊觀，歷今又三十年，而舊館之規模尙在也。」

で、(略) およそ一ヶ月で落成した。(下略) 誌の末には「萬曆丙午(1606)年、孟夏戊戌、邑人黃克謙が謹んで撰する」と書かれる<sup>(48)</sup>。

上記の碑文によれば、會館は萬曆丙午年(1606)に創られていたことが分かる。また、會館の規模及び民国に入ってからからの補修事情については、民国三年(1914)『邵武館誌』丁濟生の序に以下の様に記す。

北京邵武會館は明代萬曆丙午(1606)年、同郷の先輩黃克謙先生と諸君より建設が始められ、建設費用は千五百緡だった。會館は正陽門外にある東草廠二條胡同にあり、前は官路に隣接していて、また南北院の門と並列され、横幅は計十一丈ある。後ろは頭條胡同に達しており、壁で囲んでいて、横幅は計九丈余りある。北院は興隆街店と隣接し、南院は黃岡會館と比隣する。堂の後ろにある空き地の北には店一箇所あり、隆興街と隣接している。堂の中には武聖の肖像を奉っていて、左右の二つの龕は四邑の城隍主と亡くなった郷の先輩の位牌である。堂の後ろ及び南北の大小空き地には三つの古い木が生えている。五里の人はここに集まり、同郷の親しみや風月を語り合い、誠に勝地である。(略) 咸同(1851~1874)の間に洪・楊の乱が起り、邵は数回の兵乱に遭って、邵の建物は最も被害を受けていた。(略) 光緒戊戌(1898)、私は抜粹され、庭試を受けることになった際に、館舎はなお修復されてなかった。(略) この時に堂の南院にある空き地で黃岡館と隣接していたところが横領されたので、談判した上で、堺も明示し、ようやく元の通りに戻された。(略) 資金を出し合って、

(48) 『閩中會館志』卷三・邵武會館・文詞・一邵武會館創始誌碑文(五葉)「迨余歷仕、與百兩四十、斟水思源、寧能一日忘故里哉。(略) 諸君子咸欣樂助、爰歲餘、集千五百緡市廛焉、市凡三易、乃得今所、(略) 朝夕拮据、(略) 濡月已落成。(下略) 按誌末書萬曆歲在丙午、孟夏戊戌、邑人黃克謙頓首撰。」

※ (下略) 以降の「按誌末書萬曆歲在丙午、孟夏戊戌、邑人黃克謙頓首撰。」は李氏が調査を行っていた際に石碑が既に散逸したため、李氏が『邵武館誌』をもとに碑文の年代を補ったものと考えられる。

東西の部屋が修造され、堂の内外および南北の院の損傷が大きいものもおむね修整され、費用は計五十余金かかった。民国癸丑（1913）、私は再び衆議院議員として当選し、都へ入った。（略）館の北院は倒れそうになっていたので、改造する費用を計算した所、約白金七八百元かかる。（略）偶々国会が解散したため、実行出来なかった<sup>(49)</sup>。

以上、邵武會館志の創立及び補修については詳細な記録があるので、創立の経緯やその後の発展の様子は明白であった。また、邵武會館は興隆街に店舗を所有していて、長年賃貸していたので、横領されない様に、邵武會館の所有である石標を立て、會館公有のものとして置いていた<sup>(50)</sup>。

李氏の調査によれば、該館は当時4戸、合わせて19人が住んでいて、毎月の家賃及び資産の収入は、僅か20元のみである<sup>(51)</sup>。

## 5、汀州會館（即ち汀州北館）及び汀州南館

汀州會館と称する會館は2つある。まず、汀州北館は前門外長巷下二條胡

- 
- (49) 『閩中會館志』卷三・邵武會館・文詞四・館志序（六葉）「北京邵武館、倡建於明萬曆丙午歲、鄉先輩黃可謙先生諸君、其首事計一千五百緡、其館舍坐落正陽門外東廠二條胡同、前臨官路、與南北院之門并列、橫計地址拾有一丈、後達頭條胡同、圍牆限之、橫計地址九丈餘、北院與興隆街店相接、南院則黃岡會館毗連、堂後空地之北、店屋一所、臨興隆街、堂中奉武聖肖像、左右二龕、則四邑城隍主、與物故鄉先輩位、堂後及南北大小空地、三古木、五里人聚會於斯、叙鄉誼、談風月、洵勝地也。（略）咸同間、洪楊構亂、邵屬兵燹者數回、邵建受害尤烈、（略）光緒戊戌、余拔萃應庭試、館舍不敷、（略）是時堂之南院空地、與黃岡館屋毗臨者、被其侵佔、經與理論、指明地址、始歸趙壁。（略）捐資將東西廂修造、堂之内外暨南北院、損傷甚大者、概加修整、計費五十餘金。民國癸丑、余復以衆議院議員、當選入都、（略）館之北院、勢將倒塌、估值拆卸、改造、約須白金七八百元、（略）適國會解散、遂不果行。」
- (50) 『閩中會館志』卷三・邵武會館・軼聞遺事三（十七葉）「該館有店業、在興隆街、歷年賃人居住、即德順篷舖是也、經丁梅巖以界石標示店前、曰邵武館公業、蓋慮年久被人侵佔。」
- (51) 『閩中會館志』卷三・邵武會館・事實（十六葉）「該館現在住四戸、共十九人、每月館租及館產收入、約僅可得二十元。」



同 26 号にあり、32 号の汀州會館と區別する為に、ここは汀州北館と稱する。建設されたのは南館より早く、即ち萬曆十五年（1587）のことである<sup>(52)</sup>。

汀州北館は裴應章<sup>(53)</sup>により初めて建設された會館で、その経緯は石碑に刻まれていて、李景銘氏は會館録の文詞の條に収録しているので、以下に記す。

（前略）萬曆丙戌<sup>(54)</sup>（1584）、私は比部（刑部）の沈觀瀛と以下のことを語った。「吾ら二人は運よく、北京で 30 年間もの間、同僚として一緒に働いてきた、しかし會館が欠けていた所は、実に吾ら二人が責任を取るべきだろう。」と。そこで各々の給料から若干寄付し、この時、科挙試験を終えた直後で任命待ち中の各曹司掾史の都に滞っている者が、4・50 人いて、みなこのことに賛成し、各自が若干の金を寄付した。資金を集めたので、そこで在京の住民、施以仁の住居一ヶ所を得た。そこは正陽門の外、正東坊にあり、場所と周囲の隣接及び費用はともに券の中に記載している。（略）建物 3 軒となり、前は堂で、私は「旅萃」と名付け、易卦の義を取った。堂の東には門の中棟で、中室には郡の城隍神位を祭っている。西は官房となり、東房は館を管理する人の居室として、清掃や（門の）開閉を司る。後ろの棟は稍小さく、従室や厨房となる。既に落成すると、造りは広々として、外観も一新した<sup>(55)</sup>。（後略）

(52) 『閩中會館志』卷三・汀州北館・沿革（一葉）「汀州會館，坐落前門外長巷下二條胡同二十六號，因別有三十二號之汀州會館，故稱此爲汀州北館，其建置在南館之前，即明萬曆十五年事。」

(53) 本會日瑛修『汀州府志』乾隆十七年修；同治六年刊；卷三十・明人物「裴應章，號澹泉，清流人。隆慶戊辰進士，授行人，奉使德晉二府，陛見奏對，進止有度，神宗目之，擢吏科給事。」（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第 75 號，成文出版社，1967 年所収。）

また、[明] 李維楨『大泌山房集』卷之七十八・墓銘・贈太子少保南京吏部尚書裴公墓志銘「公名應章，字元閩，別號澹泉，汀州清流人也。」（四庫全書存目叢書・集部・別集類・第一五二冊，1997 年所収。）

(54) 「萬曆丙戌」の年がなく、「丙戌」の間違いと考える。

(55) 『閩中會館志』卷三・汀州北館・文詞（四葉）「（前略）萬曆丙戌，余與比部觀瀛沈君謀曰：“吾二人微天幸，獲侍同朝，邇旅於京，先後三十年，所會館之缺也，則吾二人者，安所辭其責”。迺各捐俸令若干，時適大比後諸計偕謁選，各曹司掾史聚

以上の石碑の内容を見れば、汀州會館は明代萬曆十四年（1586）裴應章と沈觀瀛の二人によって提唱され、同郷人官僚4・50人が出資して、創られた會館であることが分かる。また、古蹟の條には、「宣統三年（1911）、ある郷人が勝手に會館を斬姓の人に売った。中華民国になると、議員の楊樹璜等が官に訴えたが、当局が債権人保護のため、却下した。調べによると800両で売ったことを知ったが、お金が足りなかった為、10年間、そのまま買い戻せることは無かった。1921年の夏に、初めて募金して會館を補修することが議論されたので、各県の人々が積極的に義捐し、1922年2月、遂に買い戻せた<sup>(56)</sup>。」一方で、汀州會館が出来たのち、やや狭かったためだろうか、新たに汀州南館を創った<sup>(57)</sup>。汀州南館に関する記録は既に紛失していた為、李氏は以下の様な記録を残した。

汀州會館は、前門外の長巷下二條胡同32号にあり、26号にある汀州會館と區別する為には、ここは汀州南館と稱する。購入した年月について、郷人の張超南<sup>(58)</sup>が言うには、かつて館志には載っていたが、昔の館志が見つからなかった為、考証が出来ない。しかし北館の後にあることは、周知の通りで、北館は明の萬曆十五（1587）年に創られ、篤志家の尚書應章

、都下者、不下四五十輩、人人咸趨茲舉也、亦各助金若干、貲既具、迺卜得在京民、施以仁居室一所、坐落正陽門外、正東坊、方位四至及費直具載券中、（略）為棟宇凡三、前為堂、余名之以旅萃、取易卦義也。堂之東為門中棟、中室供事郡城隍神位、西為官房、東房掌館者居之、以司灑掃啓閉、後棟稍卑小、為從室、為廚舍、既落成、規模軒豁、煥然改觀矣。（後略）」

(56) 『閩中會館志』卷三・汀州北館・古蹟（一葉）「清宣統三年、郷人某、私典於斬姓、光復後、議員楊君樹璜等、控於官、卒以當局保護債權人之故、未能挽回、查原典值八百兩、本館因款項無着、遷延十年、迄未收贖、辛酉夏、始議以修館募捐、辦理此事、賴各縣踴躍贊助、壬戌二月、遂行贖回。」

(57) 『閩中會館志』卷三・汀州南館・古蹟（八葉）「並無古蹟可考、視北館遜色多矣、意者當時因北館稍狹、不敷居住、故添購此館、直等於北館之附庸。」

(58) 徐元龍修『永定縣志』民國三十年刊本；卷一二・選舉志「張超南、字蟹蘆、（光緒）十八年（1892）劉可毅殿試、二甲。官湖南新寧、湘潭、善化、衡山、衡陽等知縣、大理院推事、（略）民國授湖南省長、肅政史總統府顧問、參議院議員。」（『中国地方志集成・福建府縣志輯』第三十六冊、上海書店出版社、2012年所収。）

が、宅を寄付して出来たものだが、南館は購入したもので、北館の様に完璧ではなかった。(略)南館の門は、長巷の一番前にあり、北館の門は長巷二条にあり、南館の後門と向かいになる<sup>(59)</sup>。

以上、汀州北館と南館の創立年代及び過程について述べた。最後に、李氏が当時調査した際の會館状況についてまとめておきたい。李氏によれば、汀州北館の住民は少なく、部屋が余っている状態だったので、會館は乱雑なこともない。毎月管理人の給料・水道代・電話代の他、毎年3月23日の聖母聖誕には、會館で大祭を一回行い、義園では清明・中元節、2回の郷祭を行い、これらを合わせて、収支相償になる。該館は当時4戸、計21人が住んでおり、毎月の館産の収入は百十数元ある<sup>(60)</sup>。一方、汀州南館は福建省以外の方が住んでおり、みな借居なので、家賃を支払っていない。該館は当時5戸、計24人が住んでおり、毎月の館産の収入が約百数十金ある。北館の収支と合して清算している<sup>(61)</sup>。

## 6. 同安會館と莆陽會館

まず、同安會館は板章胡同5号にあり、館事を司る者は、委員制である為、

---

(59) 『閩中會館志』卷三・汀州南館・沿革(七~八葉)「汀州會館、坐落前門外、長巷下二條胡同三十二號、因別有二十六號之汀州會館、故稱此爲汀州南館、其購置年月、據其鄉人張蟹蘆布政超南云、館志曾有登載、今舊志難於尋覓、無從稽考、然在北館之後、盡人皆知、北館創於明萬曆十五年、乃清流裴尙書應章、捐宅充之、南館係價購、不及北館完美。(略)南館大門、係在長巷頭條、北館大門爲長巷二條、與南館後門相對。(後略)」

(60) 『閩中會館志』卷三・汀州北館・事實(六葉)「現在館中住人不多、尙有空房、故不凌雜、每月收入、除付長班工資及自來水費、電話費外、每年三月二十三日聖母聖誕、在本館行大祭一次、義園則清明及中元節、郷祭兩次、出入相抵、尙足敷用、該館現住四戶、共二十一、每月館產收入約一百數十元。」

(61) 『閩中會館志』卷三・汀州南館・事實(十三葉)「館中住有外省人、均係借居性質、不付租金、(略)統計該館現住五戶、共二十四人、每月館產收入、約一百數十金、與北館收支一併統算。」

当時の值年委員陳天錫<sup>(62)</sup>に委任していた。該館は乾隆二十五年（1760）、陳臚聲が邑人の為に自宅を寄付したものである。元々會館は内城にあったが、遠い昔なので考証が出来ず、清の初期に、許盛<sup>(63)</sup>が初めて崇文門の外に移したが、また人に横領された。乾隆九年（1744）に初めて（會館を）創るのを議論したが、遂行できず、乾隆二十五年、初めてこの會館が創られた。同治六年（1867）一回改めて補修した。今日まで保存できたのは、実に容易なことではなかった<sup>(64)</sup>。また、乾隆三十二年（1767）に李紫堂が煤市街南にある宅を白金360両で購入し、帰郷の際、會館に寄付し、會館の不動産収入となった<sup>(65)</sup>。

以上、『閩中會館志』に載せている會館の遷移について述べてきた。最後に、事実の條には、值年委員陳天錫が會館に住んでいて、同居者は長班の他に陳・林の2家族がいる。全員同安人で、一人は齒医者でもう一人は教授である。みな生活には問題なかった。該館の収支に関しては、泉郡會館と一緒に計算している。虎坊橋の義園は、陳天錫が資金8千元を集めて修理した後、土地18畝が余っているので、毎月144元の貸出金が得られる。泉郡館産の収入と合

(62) 『民國人物大辭典』陳天錫（1885-1975）「譜名作甘，字伯稼，別號遲莊，福建閩侯人，1885年（清光緒十一年）生。6歲入塾。（略）18歲習幕俗。歷入湖南武岡，善化，新田等六州縣幕。1912年參加中國國民黨；同年冬，就長沙關監督署文書職務。（略）1960年7月退休。1975年4月8日病逝。」1010頁。

(63) 林學增修『同安縣志』民國十八年鉛印本；卷之三十四・人物錄・忠義・清殉難烈士「許盛，字際斯，號武巖，康熙三（1664）年，自海上率衆歸城，授參將銜，屯壘南巖。時三藩齊動，（略）盛率屯兵，前後二十餘戰，解寧都，楊家寨，富江等圍（略）以功授南贛總兵。（略）出口隨征噶爾旦，以老乞歸，捐資三千八百金，修邑文廟及明倫堂鄉賢祠。卒於家。」（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第83號，成文出版社，1967年所収。）

(64) 『閩中會館志』卷四・同安會館・沿革（一葉）「同安會館，坐落板章胡同五號，司館事者，爲委員制，由值年委員陳天錫任之，該館創於乾隆二十五年，陳舍人臚聲，捨宅以供邑人之用，先是館在內城，久不可考，至清初，總戎許公盛，始移建崇文門外，亦被人侵佔，乾隆九年，議建未果，至二十五年，始有此館，同治六年（重修一次，保守至今，非易事也。）」

(65) 『閩中會館志』卷四・同安會館・文詞・同安會館續記（三葉）「農部紫堂李君，購屋在煤市街南頭，坐西朝東，凡三進，計十間，費白金三百六十兩，俱有契載，於其假歸也，充爲館中收稅，以備修理之資。」

わせて、支出に充てるには十分である。會館には4戸、25人が住んでいると記されている<sup>(66)</sup>。

次に、莆陽會館は賈家胡同19号にあるが、該館は元々高家寨にあり、明代に創られていたものと考えられる。光緒年間(1875~1908)に至って、全部崩壊し、空き地となり、他人に貸された。光緒十六年(1890)江春霖<sup>(67)</sup>等が共に募金して、この館を創った。故に高家寨の會館は旧館となり、賈家胡同は新館と言う。兩館ともに碑文や志書がなく、掘りどころはただ會館管理人の口述のみである<sup>(68)</sup>。また、李氏の調査によれば、會館の部屋がすくなく、長班を含めて4戸住んでおり、みな同郷人である。館長の黃子敬も會館に住んでおり、黃氏は治安総署に任職している。別の同郷人梁季平が會計を務めている。毎月の収入は70元あり、給料や修理代・祭祀には十分に足りている。會館には4戸の20人が住んでいる<sup>(69)</sup>。

## 終 わ り に

本稿は李景銘の『閩中會館志』にある明代創建の諸會館について取り上げ

- 
- (66) 『閩中會館志』卷四・同安會館・事實(五葉)「該館值年委員陳天錫，律師，即住館中，同住者除長班外，尚有陳林兩家，均同安人，一充牙醫，一任教授，生活均無問題，至該館收支，統歸泉州會館計算，自虎坊橋義地圍墻，經陳天錫籌款八千元，加以修理後，所有餘地十八畝，共二十五畝，〔以七畝爲義塚，餘出租〕出租，月可得租金一百四十四元，加以泉州郡產之收入，足供開銷各項之用，該館現住四戶共二十五人。」
- (67) 『福建通志』総卷三十四・列傳分卷三十九・清卷八「江春霖，字杏村，莆田人。自少刻苦尚志，節粗衣惡食，至爲朝官而不改。光緒辛卯(1891)，舉於鄉，甲午(1894)成進士，改翰林院庶吉士散館，授檢討，歷充武英殿纂修，國史館協修(略)丁巳(1917)正月，卒於家。」
- (68) 『閩中會館志』卷四・莆陽會館・沿革(一葉)「莆陽會館，坐落賈家胡同十九號，(略)該館原在高家寨，係創自明代，至光緒年間，全部塌壞，只剩空地，出租他人，光緒十六年江春霖杏村侍郎，及宋眞通三，吳台等，合力募捐，創置斯館。故高家寨名爲舊館，而賈家胡同名爲新館，兩創均無碑誌可考，但據司館者口述而已。」
- (69) 『閩中會館志』卷四・莆陽會館・事實(七~八葉)「該館房舍無多，連長班僅存四戶，盡是同郷，而館長黃子敬，號文欽，亦住其中，黃供職治安總署，別有同郷梁季平司會計，每月收入七十元，足供工資修理祭祀之用，該館現住四戶共二十人。」

た。會館ごとの内容に沿って、それぞれの創立過程・明清交代時の変遷・民国時代の利用状況及び収入や支出状況について述べた。その内、創立年代が特定できるものは4つのみで、それ以外は明代の何年に創られたかについて、不明である。そして、北京にある福建會館の目的としては、科挙士子の宿と官僚の集い場の2つが挙げられている。そのような目的を持っているため、多くの同郷人官僚が参与することになったのである。こうした官僚の参与は、商人たちの参与と共に、程度の差はあれ福建のみならず各地方が北京に建てた會館にも同様に認めることができる。(参考までに、付図は清末の北京に置かれていた諸地方の會館とその所在地を省ごとにまとめたものである<sup>(70)</sup>。)

北京にある福建の各會館の特徴として、諸神信仰がかなり浸透している点が指摘できる。管見の限り、福建の各會館には城隍神・土地公・媽祖・先賢等が祭られている。また、會館内に祭っている城隍神や土地公は地元の土着神であり(例えば、福州會館には長樂城隍神位を祭り、邵武會館には四邑城隍神位を祭っている)、あたかも北京にある福建の領事館の様な存在と思われる。しかし、今回は専ら明清交代期の會館の遷移に着目したので、こうした、地方的信仰をめぐる問題については、會館の組織や運営の在り方等と共に今後の課題としてなお残されており、稿を改めて論ずることにしたい。

(70) Harvard Yenching Library Rare Book : 「(最新詳細) 帝京輿圖」は清宣統元年(1909)、日本東京東新書局發行、北京京城内の各宮殿・府衙・寺廟・領事館・兵營・學校・城壁・城門・街道・胡同等を詳細に描かれている地図である。地図の上両側(赤い字)には光緒三十四年(1908)八月初一日慈禧の新政懿旨が掲載されている。中央の左右両側には「各省會館基址」と題する北京にある、直隸・河南・山西・山東・陝甘・江蘇・安徽・湖北・江西・浙江・四川・湖南・福建・廣西・廣東・貴州・雲南の17省、計417所の會館とその所在地が掲載している。地図のサイズは78×55 cm (公式ホームページより)

※図2は、左側の「各省會館基址」の福建省會館をまとめた部分の拡大である。

※図3は、上が紫禁城の(左から右)宣武門・正陽門・崇文門の三つの門で、下が先農壇と天壇である。北京にある各省の會館はこの区域に集中している。



|      |           |      |            |
|------|-----------|------|------------|
| 長德會館 | 在前門外高廟路西  | 延邵會館 | 在灘子胡同路西    |
| 長沙邑館 | 在椿樹三條胡同   | 漳州會館 | 在煤市街內小椿樹胡同 |
| 湖廣會館 | 在虎坊橋路南    | 建寧會館 | 在前門外水客胡同   |
| 湘潭會館 | 在南官園路西    | 泉州會館 | 在後公園路北     |
| 岳陽會館 | 在長巷下四條胡同  | 江州會館 | 在長巷下二條胡同   |
| 辰沅會館 | 在草廠下八條胡同  | 仙遊會館 | 在草廠五條胡同    |
| 巴陵會館 | 在高魯街南頭路東  | 龍溪會館 | 在椿樹二條胡同    |
| 寶慶會館 | 在草廠五條胡同   | 永春會館 | 在椿樹二條胡同路西  |
| 澧羅會館 | 在河北寺街路南   | 龍巖會館 | 在石頭胡同路東    |
| 武陵會館 | 在長巷上二條胡同  | 同安會館 | 在前門外板章胡同   |
| 善化會館 | 在宣武門外大街路東 | 邵武會館 | 在草廠二條胡同路西  |
| 湘鄉會館 | 在草廠十條胡同   | 仙路會館 | 在草廠五條胡同路東  |
| 永靖會館 | 在宣武門外永光寺街 | 建寧會館 | 在柳樹巷路東     |
| 江西會館 | 在楊梅竹對街    | 晉江新館 | 在粉房琉璃街中關路東 |
| 上湖南館 | 在草廠十條胡同   | 又    | 在南頭路東      |
| 萬壽會館 | 在米市胡同路西   | 惠安會館 | 在羊肉胡同路北    |
| 福建   |           | 莆陽會館 | 在崇興寺路東     |
| 福州會館 | 在前門外南下窪路北 | 全臺會館 | 在宣武門外後廠    |
| 又    |           | 漳州舊館 | 在煤市街路西     |
| 福清會館 | 在東磚兒胡同    | 漳州東館 | 在冰窖胡同      |

図2 福建省會館の部分拡大



図3 會館が集中している区域



## 参考文献

正史：

趙爾巽等撰『清史稿』（中華書局，1976年）

張廷玉等撰『明史』（中華書局，1974年）

會館志・地方志：

高登艇・藩先龍修『順昌縣志』（北京國家圖書館藏，民國二十五年鉛印本）

徐元龍修『永定縣志』民國三十年刊本（『中國地方志集成・福建府縣志輯』第三十六冊，上海書店出版社，2012年所収。）

曾日瑛修『汀州府志』乾隆十七年修；同治六年刊本（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第75號，成文出版社，1967年所収。）

陳儀修『福建通志』（上海圖書館藏，民國二十七年刻本）

李景銘『閩中會館志』（北京國家圖書館藏，民國三十二年鉛印本）

梁伯蔭修『沙縣志』民國十七年（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第233號，成文出版社，1975年所収。）

林學增修『同安縣志』民國十八年鉛印本（『中國方志叢書』華南地方・福建省・第83號，成文出版社，1967年所収。）

筆記・小説・年譜類：

郭曾忻『柳廬日記』（『歷代日記叢鈔』第一八三冊，學苑出版社，2006年所収。）

吳魯『百哀詩』（北京古籍出版社出版，1990年）

陳宗蕃編『陳玉蒼年譜』（『民國文獻資料叢編・近代人物年譜輯刊』第五冊，國家圖書館出版社，2012年所収。）

李維楨『大泌山房集』（四庫全書存目叢書・集部・別集類・第一五二冊，1997年所収。）

梁章鉅『歸田瑣記』（中華書局出版，1981年）

趙椿年署『王蘇州（仁堪）遺書』（『近代中國史料叢刊』第14輯，文海出版社，1967年所収。）

辭典・工具書：

徐友春主編『民國人物大辭典』（河北人民出版社，1991年）

朱保炯・謝沛霖編『明清歷科進士題名錄』（沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續編』第七十九輯，文海出版社，1981年所収。）

中國語著書：

陳存仁『銀元時代生活史』（上海人民出版社，2000年）